

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18730122

研究課題名（和文）現代日中関係と歴史認識問題

研究課題名（英文）Contemporary Sino-Japanese Relations and the History Recognition Question

研究代表者

服部 龍二（HATTORI RYUJI）

中央大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：80292712

研究成果の概要：

現代日中関係における歴史認識について、主に「田中上奏文」の側面から研究を発展させた。日中関係史を実証のレベルと認識のレベルという両面から分析し、歴史認識の乖離が生じる原因を解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	180,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：日中関係、歴史認識、歴史問題、外交史、国際関係、「田中上奏文」

1. 研究開始当初の背景

(1)研究経過

研究代表者は 10 数年来、日中関係を軸としながら、国際関係の研究に従事してきた。

その成果は、次のような成果として結実していた。

服部龍二『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918-1931』（有斐閣、2001 年）

服部龍二編『満州事変と重光駐華公使報告書——外務省記録「支那ノ対外政策関係雑纂『革命外交』に寄せて』（日本図書センター、2002 年）

服部龍二『国際政治史の道標——実践的

入門』（中央大学出版部、2004 年）

他方で研究者は、外交官や政治家の伝記的研究にも従事してきた。

その一端を発展させ、服部龍二『幣原喜重郎と 20 世紀の日本——外交と民主主義』（有斐閣、2006 年）として刊行した。

(2)問題意識

その過程において、こうした実証研究だけでは、中国との共通理解には到達できないことを痛感させられた。とりわけ、日中関係における歴史認識の乖離という問題に着目するに至った。

このため、歴史認識の一端を示すものとし

て、服部龍二『田中上奏文』と日中関係(中央大学人文科学研究部編『民国後期中国国民党政権の研究』中央大学出版部、2005年)を執筆した。

2. 研究の目的

(1) 主な研究目的

本研究では、こうした日中関係における歴史認識の研究を、主として「田中上奏文」の側面から、発展させるためのものである。本研究の目的は、大別して2つある。

第1に、日中関係史を実証のレベルと認識のレベルで分析し、歴史認識の乖離が生じる原因を解明することである。そのためには、着実な事例研究を積み上げながらも、日中間における発想の相違に着眼することになる。具体的には、「田中上奏文」の歴史的経緯に注目した。

この「田中上奏文」とは、昭和初期に田中義一首相が昭和天皇にあてたとされる上奏文である。その内容は、中国への侵略計画であり、東京裁判でも取り上げられた。日本では、偽造文書とされるが、中国では、本物と見なされがちである。したがって、日中間における歴史認識の乖離を象徴するものといえよう。

第2に、研究成果を活かしつつ、東アジアの協調的発展に資することである。そのためには、内外への発信に努めていく必要がある。具体的には、国内で『日中関係と歴史認識(仮)』と題する単行本の刊行を準備し、ひいては翻訳のうえで中国でも出版してみたい。

(2) 研究の特色

近年、「政冷経熱」という言葉に象徴されるように、日中間では、政治や経済に議論が集中しがちである。このため、日中文化交流の基礎となるヴィジョンを打ち出していく必要性が高まっている。

本研究に際しては、日中間における歴史認識の乖離を象徴するものとして、「田中上奏文」に焦点を合わせてみたい。

すでに、前掲拙著『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918-1931』の中文訳は、北京の社会科学文献出版社から刊行が決定されており、本研究は、いわばその続編にも相当するものである。

3. 研究の方法

(1) 史料

本研究その史料は、日本、中国、台湾、アメリカなどに散在するため、広範な調査を行った。

例えば日本についていうなら、次のような史料館である。

- ・ 外務省外交史料館
- ・ 国立国会図書館憲政資料室

・ 防衛省防衛研究所

こうした史料調査では、アメリカやイギリス、中国などの政府文書はもとより、散在する個人文書についても調査を行った。具体的には、イエール大学所蔵の王正廷文書や、コロンビア大学所蔵の張学良文書、顧維鈞文書などである。

(2) 分析

こうした実証研究と並行して、関連の2次文献をも系統的に分析し、日中間における歴史観や価値観の相違を跡づけた。

実証および認識という2つのレベルでの研究を踏まえて、日中の共通理解を模索し、ひいては東アジアの協調的発展に資するべく努めた。同時に、歴史認識にかかわる内外の二次文献を取り寄せ、系統的な分析を加えた。

そこから得られた知見は、大別して2つある。

第1に、日中関係史における「田中上奏文」の情報戦としての側面を分析し、歴史認識の乖離を原文書に即して解明したことである。そのために、交渉としての側面のみならず、宣伝としての側面にも同時に注目した。これによって、国政政治における相互認識の形成過程を多面的に解明した。

第2に、日中関係をとりまく国際環境への着眼である。とりわけ、満州事変後から日中戦争、さらには太平洋戦争にいたる過程において、アメリカの役割が高まった。

このため本研究では、日中関係のみならず、アメリカが東アジア政策において果たした役割に力点をおいた。アメリカが戦時中に行ったプロパガンダも俎上にのせた。

(3) 対外的な交流

日中両国政府主催の日中歴史共同研究に参加した。この日中歴史共同研究では、福岡や鹿児島、北京、済南などで会合を重ねた。

このなかで研究代表者は、研究成果の一部を報告にした。すなわち、「日本の大陸拡張政策と中国国民革命運動」と題される報告書第1部第3章がそれである。

これによって、中国における当該分野の研究状況についての認識を深めることもできた。報告書は、2009年中に公表を予定している。

(4) 先行研究との関係

従来の日中関係研究には、2つの傾向があったといえよう。

第1の傾向は、歴史研究の一環としての日中関係研究である。近年の代表作としては、鹿錫俊『中国国民政府の対日政策 1931-1933』(東京大学出版会、2001年)などがある。ここでは、実証水準は高いにせよ、その現代的意味については、禁欲的であるか、無関心であった。

第2の傾向は、現代志向の強い日中関係研究である。一例としては、劉傑『中国人の歴史観』(文春新書、1999年)、馬立誠(杉山祐之訳)『〈反日〉からの脱却』(中央公論新社、2003年)を挙げられよう。ここでは、提言を急ぐあまり、日中関係についての歴史的な背景や、構造的な理解を十分に掘り下げるには至っていない。

こうした両極ともいうべき先行研究のなかであって、本研究では、高度な実証水準を保ちながらも、その現代的な意味を探ろうとした。とりわけ、日中間における歴史認識の溝が生まれる背景を、具体的な事例に則しながら考察するところに独創性がある。

4. 研究成果

(1) 日中関係における歴史認識問題

21世紀アジアの共存共栄を考えるうえで、東アジア、とりわけ日中両国の役割は重要である。だが近年、日中間では、教科書問題などに端を発し、あらためて歴史認識が議論の対象となっている。このことは同時に、東アジア共同体構想などへの障壁ともなりかねないものである。

歴史認識の問題は、表面的には、靖国参拝や教科書の問題として論じられている。しかしながら、より本質的には、日中間における歴史に対する見方はもとより、史料分析の手法、さらには価値観や記憶の形成なども深くかかわってくる問題である。

本研究では、過熱化する日中歴史問題において、中国との対話を可能とする場を築くべく努めた。そのことは、政治経済を支えるべき文化交流に、共通理解のヴィジョンをもたらすものでもある。

なかでも、日中間における歴史観の溝を象徴するものとして、いわゆる「田中上奏文」について、事実関係と歴史認識の両面から研究を進めた。

この点に関する研究状況については、服部龍二『「田中上奏文」をめぐる論争——実存説と偽造説の間』(劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識——日中対話の試み』東京大学出版会、2006年)としてまとめた。

同稿が、「圍繞《田中奏摺》的論争——實際存在説与偽造説之間」(劉傑・三谷博・楊大慶編『超越国境的歴史認識——来自日本学者及海外中国学者的視角』北京：社会科学文献出版社、2006年)として中国語に翻訳された意義も大きい。

そのほか、中国や台湾、さらにはアメリカなどで新規に公開された史料を取り入れるところにも、新しさがある。

(2) 史料

史料面からの研究成果としては、著名な中国外交官である王正廷の回顧録を、服部龍二編『王正廷回顧録 Looking Back and Looking

Forward』(中央大学出版部、2008年)として刊行した。

王正廷の回顧録は、アメリカのイエール大学図書館に所蔵されている。王正廷回顧録の存在は一部の研究者には知られていたとはいえ、翻刻刊行されるのは初めてのことであり、その意義は少なくない。

(3) 伝記的研究

次に、伝記的研究としては、日本を代表する外交官の幣原喜重郎と広田弘毅についてまとめた。すなわち、服部龍二『幣原喜重郎と二十世紀の日本——外交と民主主義』(有斐閣、2006年)、服部龍二『広田弘毅——「悲劇の宰相」の実像』(中公新書、2008年)である。

幣原喜重郎と広田弘毅は、ともに日中関係でも重要な役割を果たしており、しばしばその評価をめぐる論争となっている。それだけに、一次史料に依拠した伝記的研究の刊行が待たれていた。

このほか、より一般的なものとしては、佐道明広・小宮一夫・服部龍二編『人物で読む現代日本外交史——近衛文麿から小泉純一郎まで』(吉川弘文館、2008年)、佐道明広・小宮一夫・服部龍二編『人物で読む近代日本外交史——大久保利通から広田弘毅まで』(吉川弘文館、2009年)としてまとめた。

(4) 通史

さらに、日中関係を軸とする通史的な研究として、川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』(名古屋大学出版会、2007年)を刊行した。同書は、東アジア国際政治史として、ほとんど初めてといってもよい包括的な通史の試みであり、研究の手引きともなっている。

戦間期に的を絞った論文集としては、服部龍二・土田哲夫・後藤春美編著『戦間期の東アジア国際政治』(中央大学出版部、2007年)もある。

(5) 日中歴史共同研究

日中両国政府主催の日中歴史共同研究において、近現代史篇第1部第3章を担当した。2007年11月24日には、「日本の大陸拡張政策と中国国民革命運動」と題して九州大学箱崎キャンパス国際ホールで報告した。

日中歴史共同研究の報告書は、現在とりまとめの最中であり、いずれ公表を予定している。

(6) 今後の課題

現在、「田中上奏文」をめぐる日中関係史の実証分析、および歴史認識の解明について、以上のような研究の集大成として『日中関係と歴史認識(仮)』と題する単行本の刊行を準備している。これにより、来年度には研究成果を広く社会に還元していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 服部龍二「書評：高光佳絵著『アメリカと戦間期の東アジア——アジア・太平洋国際秩序形成と「グローバリゼーション」』」(『歴史学研究』第850号、2009年) 55-58頁、査読なし
- ② 服部龍二「書評：殷燕軍著『日中講和の研究——戦後日中関係の原点』」(『史学雑誌』第117編第1号、2008年) 61-68頁、査読なし
- ③ 服部龍二「書評：酒井哲哉著『近代日本の国際秩序論』」(『日本歴史』第719号、2008年) 127-129頁、査読なし
- ④ 服部龍二「書評：後藤春美著『上海をめぐる日英関係 1925-1932年——日英同盟後の協調と対抗』」(『西洋史学』第225号、2007年) 82-84頁、査読なし
- ⑤ 服部龍二「歴史研究が現代外交にもたらすもの」(『論座』2007年9月号) 60-65頁、査読なし
- ⑥ 服部龍二「日本研究における外国史料の活用」(『日本史研究』第544号、2007年) 80-81頁、査読なし
- ⑦ 服部龍二「読書案内：歴史認識問題」(『歴史と地理』第614号、2007年) 39-42頁、査読なし
- ⑧ 服部龍二「満州事変前の日ソ関係——日本外交史の側から」(『ロシア史研究』第78号、2006年) 33-37頁、査読あり
- ⑨ 服部龍二「幣原喜重郎について——外務省記録とその周辺」(『外交史料館報』第20号、2006年) 21-41頁、査読なし

[学会発表] (計1件)

- ① 服部龍二「日本の大陸拡張政策と中国国民革命運動」(日中歴史共同研究、2007年11月24日、九州大学箱崎キャンパス国際ホール)

[図書] (計11件)

- ① 服部龍二『広田弘毅——「悲劇の宰相」の実像』(中央公論新社、2008年) 296頁
- ② 服部龍二編『王正廷回顧録 Looking Back and Looking Forward』(中央大学出版部、2008年) 208頁
- ③ 服部龍二「村山談話と外務省——終戦50周年の外交」(田中努編『日本論——グローバル化する日本』中央大学出版部、2007年) 73-102頁
- ④ 服部龍二「ワシントン会議——海軍軍備制限条約、九カ国条約への調印」、「幣

原喜重郎外相と南京事件——対中政策をめぐる論争」(鳥海靖編『近代日本の転機 明治・大正編』吉川弘文館、2007年) 279-286、287-295頁

- ⑤ 服部龍二「満州事変後の日中宣伝外交とアメリカ——『田中上奏文』を中心として」(服部龍二・土田哲夫・後藤春美編『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、2007年) 199-275頁
- ⑥ 服部龍二「ワシントン体制下の国際政治——1920年代」(川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』名古屋大学出版会、2007年) 114-136頁
- ⑦ 服部龍二「村山談話と外務省——終戦50周年の外交」(田中努編『日本論——グローバル化する日本』中央大学出版部、2007年) 73-102頁
- ⑧ 服部龍二『幣原喜重郎と二十世紀の日本——外交と民主主義』(有斐閣、2006年) 336頁
- ⑨ 服部龍二「『田中上奏文』をめぐる論争——実存説と偽造説の間」(劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識——日中対話の試み』東京大学出版会、2006年) 84-110頁
- ⑩ 服部龍二「圍繞《田中奏摺》的論争——實際存在説与偽造説之間」(劉傑・三谷博・楊大慶編『超越国境的歴史認識——来自日本学者及海外中国学者的視角』北京：社会科学文献出版社、2006年) 82-110頁
- ⑪ 服部龍二「第1次近衛声明前後の国民政府外交部」(佐藤東洋士・李恩民編『東アジア共同体の可能性——日中関係の再検討』御茶の水書房、2006年) 57-74頁

[その他]

ホームページ等

<http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~rhattori/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

服部 龍二 (HATTORI RYUJI)

中央大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：80292712

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号

